

草庵仏教

第152号
(発行日)
2003年2月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:kimyoun3@zeus.eonet.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
毎月22日午後2時
.....
- * 念仏座談会
第1土曜日午後3時
第3土曜日午後3時
- * 8月の同朋の会は休会

煩惱と大悲

嫁の態度に私自身が悩まされてしまいました。こういう場合どうしたらいいんでしょうか

ことで、仏教ではそういうのを宿業因縁という言葉で表してきたく思います

に私たちは腹が立つても、《彼が私にきつく当たるのは、私にはよく分からないが何かわけがあるってああいう態度をとってしまふのだから》と受け取ると、少しは相手を許せるようですね

P 「母親が入院してやっと退院しました。それでホッとしていますが、心にモヤモヤするものがあつて」

D 「ムカツク気持ちを簡単に取り除くような都合のいい方法はないですね。あなたのような辛い気持ちになることはよくある話ですが、そういう時、私の先生がよくこんなことをおっしゃってました」

D 「宿業の因と外からのさまざまの縁が人の行動に強く影響をおよぼしているということですね」

P 「いろいろな縁というのは」

D 「どうしてモヤモヤするのですか」

P 「どのようなお話ですか」

D 「たとえば、会社でその日機嫌が悪く周りの人にあたりちらす人がいて、事情をよく聞くとその人は朝、家を出る時に夫婦ゲンカをして、そのイライラを抱えたまま出社したので、周りの社員にきつく当たってしまった。そういうこととか、あるいは本人しかわからない体調不良があつて、他人に対する態度が険悪になることがあります。そういう事とは知らずにその人の態度にいやな思いをした人が腹を立ててしまう。けれども、実際は険悪にしてしまう要素がその人の家の中のゴタゴタだったり身体の不調だったというふうな、そういう縁によつて、その人が周りの人に不快感を与えてしまふ。そういうことがしばしばありますね」

D 「ええそうです。仏教では性格や人間性にはその人の過去(この世に生まれる以前から)の行の蓄積が大きく影響しているといわれます。ですから容易に自分の性格なり人間性を変えることが本人にもできないのです」

P 「母の入院中、私が看病をずっとしてきましたが、弟の嫁は近くに住んでおりながら、見舞いにちよつと来るだけで、母の世話をほとんどしませんでした。そのことがいまだに胸につかえています」

D 「《なんでこうしてくれないのか》とか《どうしてあんなことをするのか》というように相手に対してムカムカするけども、そういう時に、《あの人はそうせねばならないわけがあつたんだ》と、そう思うてみるのですね」

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「ええそうです。そうすると、現在の性格というものは、生まれる前の行の集積やら生育歴やらが影響するとなると、簡単に性格を変えることはできにくいことになりまふ。これは他人ばかりか自分自身にも当てはまります」

D 「要するに弟の嫁さんが世話をしなかつたことに腹が立つて、それでモヤモヤし続けているのですね」

P 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

P 「そうです。胸に憤りのようなものがつかえていて」

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「それにしても世話をしなかつた弟さん夫婦が苦しいのなら分かりませんが、親の世話をしてきたあなたが苦しい思いをするのは割に合わない話ですよ」

P 「この場合の《わけ》というのをどう受け取ればいいでしょうか」

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

P 「当の本人たちは何とも思わず、私の方がムカムカして、二重にいやな気がします」

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「弟さん夫婦の態度は批判されるとしても、あなたが悩んだり苦しんだりする必要はないですものね。あなたはやるべき事をちゃんとやってきたんだから」

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

P 「そう思うんですけど、弟の」

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

D 「《なんで》と《どうして》という言葉を深く意味が深いと思ひます。必然性ともいふのでしようか。本人にも自由にならない、しかも自分が《どうしてもそうせざるをえない》《どうして》《何ものかの》

*

P 「その人の行いは、性格という条件の影響を受けやすいのですね」

D 「ええそうです。だから性格（宿業）の因によって、彼女がそういう行動を取ってしまい、それは彼女自身もどうすることもできない。《カニは縦に歩こうとしても、やっぱり横に歩いてしまう》というような自分の性格からの不自由さのことですな」

P 「性格とかそれ以外のいろんな縁という《わけ》で、彼女はそういう行動を取ってしまうと受け取るのですな」

D 「ええそう受け取ってみる、それもただ彼女だけの話ではなく、私自身もこうした宿業因縁のもよおしで動いているのではないか、自分の性格を自分でもどうすることも出来ない、人も自分も同じようなものと受け取って見ると、少しはゆとりを持って他者の行動、ことに他者の不愉快な行動を受け取ることが出来るかも知れません」

P 「ところでDさんは、他者のおもいやりのない冷たい行為に対して、《わけがある、わけがある》と思うことよって腹が立つことではないのですか」

D 「そうですね。《わけ》があると思うと楽になる場合もあります。しかし、どうしても腹が立つてしまう時もありますな」

P 「そういう時はどうしますか」

D 「どうもしません。もうナン

マンダブツです」

P 「相手の行いに腹が立つたらナンマンダブツなのですね。それはどういうことなのでしょうか」

D 「人様の行いをその人自身が改めることも出来ないようだし、変えようもしないし、いわんや私が変わることも出来ないの、《お手上げのナンマンダブツ》、《しゃあないなあ、ナムアマダブツ》です」

P 「仕方ないのでナムマンダブツ、なのですね」

D 「そうですね。しかも、他者に対して私が腹を立ててしまうことを、私自身で止めることもできない、いわば私自身に対して《お手上げのナムアマダブツ》です。《仕方ない、ナンマンダブツ》です。相手をどうしてみようもないし、相手に腹を立ててしまう自分をどうしてみようもない、《どうにもならねば、我が名を称えよ》の思し召しのまま、ナムアマダブツ、ナムアマダブツで、何とか通らしていただいています」

P 「《通らしていただいています》というの？」

D 「南無阿弥陀仏は私のようなお粗末な者によりそって、導きまもりたもう弥陀の大悲の結晶です。この南無阿弥陀仏の大悲が私の心に流れ込んでくださると、モヤモヤとかイライラとかムカムカが次第に居場所が無くなって、南無阿弥陀仏と共に流

れて行くようです。だから一時は怒りで胸がつかまったりしますが、次第に流れていって溜まらなないので、そのつど何とか通らしていただいています。」

P 「阿弥陀様の慈悲でないと流れないのでしょうか」

D 「仏様でなくても、たとえあなたのご主人があなたの憤懣（ふんまん）やらやるせない気持ちを親身になつて聞いてくれたり心から共感してくださるなら、胸にしまったモヤモヤや怒りの感情が流れていく縁になります。カウンスリングなどはそれですね」

P 「子供の頃、外でケンカして泣かされ、辛い気持ちで家に帰るとお母さんがヨシヨシと言って頭をなでてくれました。そうすると、気持ちが楽になったものですね」

D 「怒りも憎しみも怨みもいやな感情です。だれもそういう感情を持ち続けたいとは思いません。道理や理屈で納得しても、胸に溜ま（た）っているやりきれない感情はなかなか流れていきません。ところが、いやな辛い感情は浄らかで純な愛情にふれて、むすぶれがほどけていくように思います。情は情によつて浄化されるのではないのでしょうか。不思議なことです」

P 「そうかもしれませぬね。ただなお疑問なのは、《仕方ない、ナンマンダブツ》という生き方では、どうもアキラメ的、消極的な感じが否めませぬ」

D 「外から見るとそういう感じに受けとられるでしょう。ただ、清沢満之師に《過去の事に対してはアキラメ主義なり、現在の事に対しては安住主義なり、未来の事に対しては奮励主義なり》という言葉があります。私のいう《仕方ない、ナンマンダブツ》は清沢師のいう《過去の事に対してはアキラメ主義なり》のことです」

P 「過去のことに対してあきらめるというのは、済んでしまったことに対して、こだわり続けないことなのですね」

D 「ええ。仕方がないとアキラメるのですが、これは単に消極的な生き方ではなくて、これはこれからのことにはできるだけ励むということにつながります。もし、いつまでも過去のことこだわっていると未来に対して歩を進めません。こだわりすぎると、前に進めなくなり。神経症（しんけいしょう）がいわばこの状態で、済んでしまったことにいつまでも心が固着してしまつて、後ろ向きそのまま新たな一歩が出ない状態です。過去にあきらめられるから、未来に前進できるのではないのでしょうか」

P 「わかりました」（了）

歎異抄 第十三章第一講

弥陀の本願不思議におわしませばとて、悪をおそれざるは、また、本願ぼこりとて、往生かなうべからずということ。この条、本願をうたがう、善悪の宿業をこころえざるなり。よきこころのおこるも、宿善のよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも、悪業のはからうゆえなり。

(歎異抄第十三章)

現代語訳(阿弥陀仏の本願のはたらきが不可思議であるからといって、自分の犯す悪を恐れないのは、すなわち(本願ぼこり)であって、これもまた浄土に往生することができないということについて。

このことは、本願を疑うことであり、また、この世における善も悪もすべて過去の世における行いと心得ていないことなのです。

善い心がおこるのも、過去の世の善い行いがそうさせるのです。悪いことを考え、それをしてしまうのも、過去の世の悪い行いがはたらきかけるからです。

*

今回からは、第十三章に入ります。この章では「本願を信じているからと言って自分の悪を慎まないのは、本願に甘えてつけあがっているのであって、往生は出来ないのである」という異義を唯円房は批判しています。それに対して、「煩惱具足の凡夫は悪を慎みたいと思えば自由に慎め、善をなそうと思えば自由

になす事の出来るものではない。自分で自分の心もままならず行いもままならない不自由な身である。そういう身においてはこうした不自由な身をそのままを助けようとして誓願してくださった弥陀の本願をたのむほかに道はないのである。それなのに悪を慎まなくては往生できないなどというのは、本願を疑っているのである。自分の現実の姿を知らないからである」と唯円房は申されるのであります。

*

ここで「弥陀の本願不思議におわしませばとて」といわれている「弥陀の誓願の不思議」について、繰り返し述べたいと思います。

弥陀の誓願不思議について説かれていたのが仏説無量寿経(大経)という真宗の根本経典です。

大経は、釈迦仏のお弟子の阿難が、ある日釈迦仏のお姿がいままで拝見したことがないほど光り輝いておられるのでそのわけをおたずねになる、その問いを縁として、釈迦仏が弥陀の本願のことを説法された経典です。その説法によりますと――

悠久遙かなる昔、世自在王仏という仏がお出ましになりました。その仏の在世の時、一人の国王が仏の説法をお聞きになり非常に感動されて、国も王位も捨てて、求道者となられ、この上なきさとの道を求められました。その求道者(菩薩)の名を法蔵といいました。

この法蔵菩薩は自らがこの上ないさとりを完成したいと願われるだけではなく一切衆生に大安(涅槃)を与えたいという、広大な願いを起こされました。そしてご自分の志願を世自在王仏に申

し上げ、「どうか私の願いを実現するための行をお説きください」とこわれました。世自在王仏は「それはあなたご自身で知りなさい」と応えられましたので、法蔵は「それは私のおよぶところではございませぬ。どうかお説きください」と懇願されました。

法蔵菩薩の志の深くて広いことをしられた世自在王仏はたくさんの浄土の姿を法蔵にお見せになりました。さまざまに仏の国々を拝見した法蔵は、この上ない勝れた願いを発し、五劫という長い間御思案されて、最上の仏と浄土はどうあるべきかとか、浄土を完成する修行について思案されました。また浄土に一切衆生を生まれしめて完全な悟りの安楽を成就する道をお考えになりました。そしてその仏と浄土と衆生を浄土往生せしめる法を実現したいという誓願を世自在王仏の前で表白されました。

その誓願は四十八通りの願で、それらの願を成就することによって、仏・浄土と一切衆生の浄土往生の道を完成しようとされました。その四十八願はたとえば第一願は「私の仕上げる浄土は地獄や餓鬼や畜生のない国にしたい」という願いであり、第二願は「ひとたび浄土に生まれた者は二度と地獄や餓鬼や畜生の世界には落ちない、そういう浄土にしたい」というような内容です。

そして第十八番目に一切衆生を平等に浄土に生まれしめる願を誓われました。これを第十八願と申します。

こうして四十八願を成就するために法蔵菩薩は長い長い修行をされました。貪・瞋・癡の無い行であるとか六波羅蜜の行などの菩薩行を修められました。そ



心ら提灯
(C)SHOGAKUKAN
INC.

して十劫という昔にその願行が成就して法蔵菩薩は阿弥陀仏となり、阿弥陀仏の最高の浄土はできあがり、万人を浄土に生まれしめる法が完成しました。そして、衆生に法の恵みを与えるべく永遠に活動しておられるのです。

釈迦仏は阿弥陀仏の誓いの名号(南無阿弥陀仏)を聞信する時、即座に浄土に往生するべき身と定まり、いのちを終えて浄土に生まれて仏陀になると説かれ、それゆえ弥陀の本願を信じ念仏申して浄土に生まれよ、それが真の救いであると私たちにすすめて下さる――

*

極くはし折って、大経の内容について述べました。そしてこの歎異抄で弥陀の本願不思議といわれるのは大経に説かれている阿弥陀仏の第十八願のことです。

ただこの歎異抄で弥陀の本願という場合、唯円房の念頭にあるのは大経の経文の第十八願というより、その第十八願を善導大師が「解釈された十八願」すなわち

「若我成仏十方衆生 称我名号下至十声 若不生者不取正覚」

(もし我、仏と成らんに、十方の衆生、我が名号を称すること下十声に至るまで、もし生まれずば正覚を取らじ)

という願言です。法然聖人はこの願を念仏往生の願ともうされ、この願こそ一切

衆生を平等に救いたもう阿弥陀仏の大慈大悲の誓願と仰いでおられます。親鸞聖人も同じです。念仏往生の願はいわば「我が名を称えよ、必ず救う」という弥陀の誓いです。香樹院師の言葉で言うところ「ただ称えるばかりで助ける、その他に何もいらぬぞ」との大悲のみ心です。この思召しに聖人は尽十方無碍光の仏徳を仰いでおられます。一念多念文意に

「宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり。この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのたまいて、無碍のちかいをおこしたまうをたねとして、阿弥陀仏と、なりたまうがゆえに、報身如来ともうすなり。これを尽十方無碍光仏となづけたてまつれるなり」

(宝海というのは、どのような衆生も除き捨てることなく、何ものにもさまたげられることなく、何ものも分け隔てることなく、すべてのものを導いてくださることを、大海がどの川の水も分け隔てなく受け入れることにたとえておられるのである。)

この一実真如の大宝海からすがたをあらわし、法蔵菩薩と名乗られて、何ものにもさまたげられることなく衆生を救う尊い誓願をおこされた。その誓願を因として阿弥陀仏となられたのであるから、阿弥陀仏のことを報身如来というのである。この如来を、世親菩薩は尽十方無礙光仏と名付け申しあげられたのである)

＊
弥陀の無碍の誓いは「よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまう」て救おうとの誓いでありま

す。すべてのものを嫌うこと無く、また人の行いや性質や置かれてある立場などの人のあり様をすこしも邪魔にせず、分けへだて無く、平等に導き救おうとの思召しであり、お働きが弥陀の本願力であります。まさに不可思議であります。万人をきらわず、さわりなく、隔てず救おうとお誓いになって、この無碍光のお徳が表われたのが念仏往生の願であります。「我が名を称えよ」には、かくも広大な大悲の仏心が全現しているではありませんか。

この本願を受け入れる時、不思議なことに慈悲のお心が私の心に流れ入ります。阿弥陀仏と私の心の交わりをする回路ができるともいえましようか。阿弥陀の撰取心光の中で人生生活をする事が出来るのです。これが何よりの幸せであります。

＊
どうして、「ただ念仏してこい、必ず助ける」との誓願に信順するところに「弥陀に助けられる」事実がおこるのか、それは不思議と言うほか無く、人知では分かりません。ただ仏智から出てきた人間救済の法であります。

＊
このことは不思議なことですが、あえて少しかがってみれば、人はもともと阿弥陀仏と不可分であり、しかも不可分であるという原事実があつて、その事実を背景にして、念仏往生の願(撰取不捨の願)が表れてきたのではないかと想像をたくましくしています。

阿弥陀仏は生きとし生けるものと存在の初めから離れがたく結びついていることになりました。このことは聖人のお書きになったものの中にかがえらると思いません。その一つをご紹介しますと、

「この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり」(尊号真像銘文)

如来は十方世界にみちみちているといわれ、さらに

「この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、一切群生海の心なり」

(唯信鈔文意)

ともあります。如来は、一切衆生の心にまで本来なつておられる。いわば本来、人は如来と離れることの出来ないものでありましよう。にもかかわらず、人は迷い心を起こし如来に背いて、我執我愛の自我をまことの我と思ひこんで、苦悩し流転している。そういう有様が現実の私どもの姿です。それゆえ煩惱具足の我は仏にあらざして、仏と人は不可同だといえましよう。だから、凡夫はたとえ本来如来の徳に即していても、「清浄真実の心なき」身となつていたのであります。そういう私どもが弥陀の本願を信じ念仏を申すところに、阿弥陀仏と私が本来の関係回復し、人に離れない如来の徳が活性化するのはなかるうかと思つています。

＊
もともと弥陀と人の不可分という原関係、原事実があつてこそ、人が弥陀に撰取されるのであつて、人と全く離れたどこかに阿弥陀様がいて、人の処に来て救い上げてくださるといふようなものではないであります。

＊
ともかくも弥陀の本願不思議にましまして、人の善悪淨穢に好き嫌いをしたまわず、人の有様に妨げられず、いかなる人も排除することなく、「人そのもの」をおさめとりたもうのであります。「悪

もさわりとならず」といふ本願のお心は、毎日のように「行いの善し悪し」に苦悩する者にとって大安慰となつてくださいます。

＊

ところが異義者は「本願の不思議に助けられるのだからといって、それに甘えて悪を慎まないようなことでは、浄土往生ができる道理はない」といわれるのであります。この主張は、一応もつともな説で、はじめに仏道を歩もうとして人からの言葉だとも言えます。ですからこういう主張はつつしんでうけたまわつて、その上で、(悪を慎まなければ本願を信じて往生は出来ないといわれるが、さあそれで私は救われるであろうか)と自らの悩みの上に、弥陀の本願を引き当てて仰いでみる時、この主張は聖人の仰せくださる浄土真宗に異なる説であるといわねばなりません。(了)